

Title	閉会礼拝：説教「嘆きの心に賛美の衣をまとして」イザヤ書 第六一章一-四節(第二回東日本大震災国際神学シンポジ ウム)
Author(s)	東野, 尚志
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.56, 2013.10 : 207-213
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/de tail.php?item_id=4937
Rights	


 The logo for SERVE features the word "SERVE" in a bold, serif font. The letter "V" is replaced by a stylized icon of a quill pen with its tip pointing downwards, set within a square frame.

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

閉会礼拝

説教「嘆きの心に賛美の衣をまといつて」イザヤ書第六章一―四節

東野 尚志

昨年（二〇一二年）の一二月、日本基督教団の石巻山城町教会が、「東日本大震災の記録」と題する一三〇頁ほどの書物を刊行されました。石巻山城町教会は、宮城県石巻市にある教会員三〇名ほどの教会です。二〇一一年三月一日一四時四六分、あの震災以後の教会の歩みを客観的な記録としてまとめるとともに、牧師と教会員が、あの日、あの時、自分がどこで何をしていたかを思い起こしながら、それぞれの体験と想いをつづった文章を集めているのです。あの日、あの時、自分がどこで何をしていたか、あの大きな揺れを経験した人たちは、生涯、忘れることはないと思います。そして、直接には、あの激しい揺れや津波の被害を経験しなかつた人たちもまた、その日常の生活を大きく揺さぶられました。私たちは皆、二〇一一年三月一日という日付を、生涯忘れることはないと思います。いや、忘れてはならないと思うのです。

あの悲惨な出来事をどのように受けとめてよいかもわからず、多くの人たちが、途方に暮れて、つぶやきました。「どうして、こんなことが起こるのか」。普段は神など信じていない人たちも、この時ばかりは問わずにいられなくなりま

した。「いったい、神は何をしていたのか」。「本当に、神はいるのか」。神に対してその責任を問い、説明を求めたのである。繰り返して、「想定外」という言葉が語られました。それまでの自分たちの経験や知識を基準にして、想定しうる程度をはるかに超えていたということです。確かに、百年に一度、千年に一度ともいわれる自然災害となれば、自分が生きている間には経験しない人たちも多いのです。時の首相は嘆いたかもしれません。どうして、自分が総理大臣の間にこんなことが起ったのか。確かに、千年に一度という大災害がわずか一年足らずの首相の在任中に起ったというのは、気の毒な話です。国民にとつても不幸な話でした。けれども、たまたま運が悪かったということでは済みません。「想定外」という言葉や、これまた繰り返し語られた「安全神話の崩壊」という表現がいみじくも示しているのは、あの三・一一の大震災によって、私たちがそれまで安心して生きてきた物語がもろくも破綻してしまったということです。もうそれまでの物語では、説明がつかなくなったのです。

二年前の三・一一の衝撃によって破綻した物語、それは、神なしに描かれた世界と人間についての物語であったと言つてよいのだと思います。いや、人間にとつて都合の良い造り物の神、ただ祝福と恵みだけを与えてくれて、決して裁くことのない神を想定した物語です。この世界と人間をお造りになり、ただ一人、それを裁くことのできる生けるまことの神ではなくて、人間が自分のために造り出した飾り物の守り神を祭つて、安全よりも豊かさや便利さを追い求め、平和がないのに「平和、平和」と告げる偽りの預言者に耳を傾けながら描いてきた物語なのです。しかしながら、人間が自らの名を挙げるために天にまでも届かせようと築くバベルの塔は、神が下つて来られれば崩壊します。その意味では、大震災の出来事は、神を恐れず、自らが神になろうとする人間への神の警告であり、裁きであると言つてよいのかもしれません。もちろん、間違えてはなりません。被災した人たちが裁かれたというのではない。そうではなくて、神を拒絶しておごり高ぶる文明社会に対する裁きであり、この世界に対して、神の国の福音を宣べ伝えるようにと召され、遣わされているにもかかわらず、一つになって主を証しすることができずにいる私たち教会に対する裁きで

す。むしろ、被災した人たちは、私たちの身代わりとなった犠牲者だと言ってもよいのです。だからこそ、主イエス・キリストご自身が、十字架のお姿でその苦しみと痛みを背負いながら、被災した人たちのただ中に共におられます。そこに、新しい救いの物語が告げられなければならないのです。

旧約聖書の預言者もまた、神の厳しい裁きによる崩壊を経験した人たちでありました。イザヤ書の第四〇章以降は、神の民の背きのゆえに、王国が敵の手によって滅ぼされ、敵の都、バビロンへと捕らえ移されて、深い嘆きと絶望の中にあつた人たちに、主の言葉を語るべく召された預言者の言葉を記しています。第一章から三十九章までに記されたアモツの子預言者イザヤとは区別して、第四〇章以降の預言は第二イザヤと呼ばれます。主の召しを受けて、呼びかけよ、と命じられた預言者は、嘆き苦しむ捕囚の民の間に身を置きながら、呻くように言いました。「何と呼びかけたらよいのか。肉なる者は皆、草に等しい。永らえても、すべては野の花のようなもの。草は枯れ、花はしぼむ。主の風が吹きつけたのだ。この民は草に等しい」(四〇・六一七、新共同訳)。

しかし、主はなおも、呼びかけるべき言葉を与えられます。「草は枯れ、花はしぼむが／わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ」(四〇・八)。確かに、草は枯れ、花はしぼむように、肉なる者の命ははかなく過ぎ去る。しかし、主なる神の言葉はとこしえに立つ。そして、第二イザヤは、背きの罪が贖われ、罪赦されるために、苦難の道を歩む主のしもべの歌を歌いました。第五章をクライマックスとする苦難のしもべの歌を通して、十字架にかかられた救い主キリストのお姿を指し示したのです。

やがて苦役の時は終わり、捕囚の地から解放された民は、エルサレムへと帰還することになります。ところが、主の神殿を再建して、神の都を復興するために帰ってきた民は、厳しい現実と直面することになります。エルサレム周辺地域の荒廃は想像以上であり、自分たちの生活を維持するのが精一杯、神殿再建の夢はしぼんでいきます。そういう中

で、みたび、主は預言者をお召しになります。捕囚から帰還した民に慰めを告げ、エルサレムの神殿が象徴する神への信仰と信頼を再建する望みを与えるために、主は預言者を遣わされるのです。

イザヤ書第六一章の御言葉は、第三イザヤの召命の記事とも呼ばれます。預言者自身が、一人称で「わたし」と語りながら、自分自身の召命体験を語るのです。「主はわたしに油を注ぎ／主なる神の霊がわたしをとらえた」。主なる神は、油注ぎを通して、預言者にご自分の霊を注がれます。神の霊の宿りによって、神から託された使命を果たすために立てられるのです。続けて、召された預言者の使命が告げられます。「わたしを遣わして／貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み／捕らわれ人には自由を／つながれている人には解放を告知させるために」。「貧しい人」というのは、文字通り経済的に貧しいということもありますが、聖書の中では、むしろ、「苦しむ者」「抑圧されている者」という意味に近い使われ方をしています。「捕らわれ人」というのは、負債を返すことができないために、獄につながれているような人を指します。そのようにして「捕らわれ」「つながれている」人に、解放を告げるといいます。

これは、ヨベルの年における奴隷の解放を告げる言葉です。七年ごとに安息年が定められ、七を七回繰り返した五〇年目には、すべての負債が帳消しにされ、奴隷が解放される「ヨベルの年」が定められていました（レビ記二五章参照）。実際には、規定通りに行われていたかどうかは疑問視されますけれども、第三イザヤはここで、しいたげられた者たちの解放を告げるとき、ヨベルの年の理念を引き合いに出しているのです。二節に記される「主が恵みをお与えになる年」という言葉も、「ヨベルの年」を暗示する言葉です。エルサレム神殿の再建には、周辺の人たちからの妨害もあつたようです。けれども、そういう厳しい現実の中にあつて、さらにはその現実を越えて、解放の年、ヨベルの年が象徴する、終わりの日の完全な裁きと救いを望み見ているのです。

二節には、「慰め」という第二イザヤのメッセージが引き継がれています。第三イザヤの務めは、突き詰めて言えば、「嘆き悲しんでいる者すべてを慰めること」と言ってもよいのです。聖書における「慰め」は、本来、とても力強い言葉です。新約聖書においても、「慰める」と訳される言葉はまた「励ます」という意味でもあります。本当の慰めは、人を悲しみの中から立ち上がらせ、賛美を歌わせませす。私たちの生き方を、大きく転換させていく力となるのです。それは、この後の三節に描かれる対比によく現れていると思います。「シオンのゆえに嘆いている人々に／灰に代えて冠をかぶらせ／嘆きに代えて喜びの香油を／暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために」。「灰」を頭からかぶるのは深い悲しみの表現でした。それに対して、「冠」というのは、喜びの象徴です。「嘆き」に対して「喜びの香油」、「暗い心」に対して「賛美の衣」が備えられるというのです。

このたびの説教の題は、三節の言葉を少し組み替えて、「嘆きの心に賛美の衣をまとって」としました。もとの言葉では、「嘆きに代えて喜びの香油を／暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために」となっています。「賛美の衣をまとって」という表現は、この後の一〇節に出てくる「主は救いの衣をわたしに着せ／恵みの晴れ着をまとわせてくださる」という言葉とも響き合います。そうだとすれば、「嘆きに代えて」というよりも、むしろ、その嘆き沈む心を包み込んで慰め癒すようにして、救いの衣、賛美の衣、恵みの晴れ着をまとわせていただくことができます。それはまさに、私たちが、主イエス・キリストと一つに結ばれて、キリストを着るということだと言ってもよいと思います。嘆き呻く私たちのただ中に、十字架のお姿で、そのすべての痛みと苦しみを担っていてくださるキリストと出会うならば、私たちは、復活の主の栄光にも合わせられると信じていることができます。イザヤは告げるのです。「彼らは主が輝きを現すために植えられた／正義の檜の木と呼ばれる」。

イザヤは、さらに再建の望みを告げます。「彼らはとこしえの廃虚を建て直し／古い荒廃の跡を興す。廃虚の町々、

代々の荒廃の跡を新しくする」。今、被災地では、確実に、壊れた建物の再建、復興が進んでいます。けれども、そのとき、崩壊した神話に代えて、新しい救いの物語が共有されなかつたならば、人々の傷ついた心を置き去りにしたままの形だけの再建にしかありません。二年前の大震災の直後に、東京神学大学を卒業して、石巻山城町教会に赴任した若き伝道者は、昨年刊行された記録文集の冒頭の文章の中に、このように記しています。

どのような状況にあつても御言葉を語り続けること、それは津波によつて破壊された場所であつても同じである。ではなぜ語らなければならないのか。それは主が語つてくださる御言葉こそ、決して揺らがずに立ち続けるものだからであり、御言葉によつて知らされるイエス・キリストにこそ究極的な慰めがあるからである。コリントⅡ四・一八でパウロは次のように言う。「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」。教会が主から託された使命、なすべきことは先ず何よりも、その地にあつて希望を語り続けることである。人々に寄り添う働きも重要な働きである。しかし、究極的な救いと慰めがイエス・キリストの福音にあることを私たちは忘れてはいけない。私たちは福音を恥としてはいけないのである。

この世界と私たち人間の命を造つてくださった神は、ご自身の御心に逆らう力がこの世界を支配していることを、黙つて見てはおられません。神はその全能の力を注いで、この世界と私たちを罪と死の支配から解放しようとなさいました。ご自身に背いて罪を犯し、ご自身のもとから失われてしまった私たち人間を取り戻すために、さらにはまた人間の罪のために呻き苦しむすべての被造世界を救い出すために、神は、ご自身の独り子を、私たちと同じ人間としてこの地上に遣わし、私たちすべてのものの罪をその上に負わせ、十字架の上で贖いの死を遂げるといふ道を歩ませられたの

です。さらに、御子を死人の中からよみがえらせ、死によってもむなくなくなる事のない命の道を拓いてくださいました。そして、終わりの日には、主イエス・キリストが栄光の姿で再びこの地上にお出でになり、世界と私たちの救いを完成してくださいます。聖書が私たちに告げている大いなる救いの物語の中にこそ、この世界と人間の悲惨な現実に対する神からの答えがあり、廃墟の中から望み見る救いの希望があるのです。

午前中のデイスカッションの中で、物語を作ることについて語られました。自分の物語の中に、神がいてくださることが大事だと告げられました。けれども、本当にそれだけで救いになるのでしょうか。大切なことは、神を自分の物語の中に取り込むことではなくて、私たちのほうが神の救いの物語の中に招き入れられていることなのだと思います。イエス・キリストの死とよみがえりに合わせられて、イエス・キリストの物語の中に生かされるのです。

主イエスが、その宣教のはじめ、安息日の礼拝のために育たれたナザレの会堂に入って聖書を朗読しようとされたとき、預言者イザヤの書の巻物が渡されました。主イエスは、第三イザヤの召命の記事を読み、なおも注目している会衆に向かって宣言されました。「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」。被災の傷跡を残す地にも、主の御声が響きます。十字架と復活の主がいますところに、真実の慰めと望みがあるのです。主イエス・キリストにおいて現され、やがて完成される神の大いなる救いの物語が、今も被災の地で苦しみ嘆く心を包み込み、賛美の衣をまとわせてくださるように、御言葉の力に信頼し、御言葉によって共に生きていきたいと願います。